

鈴木 雄雅著
大学生の常識

世間の人々が大学の教員や学生そして大学自体に対して抱いているイメージとはいったいどのようなものであるのか。「象牙の塔」にこもり、「好きな時間に、好きなことを教えている」教員。授業中に、私語のみならず、携帯電話の着メロをあちこちで鳴り響かせる学生。そして、「レジャーランド」といわれる大学……。

本書は、「大学教育が一般社会から隔離された中で保たれてきたために起きている現実、大学の常識は世間の非常識かどうかを世に問うもの」である。本書を通して、「大学に対する画一的なイメージが打ち破られ、新しい大学教育とは、

育とは、大学教育に何が望まれているのか」を世間の人々に考えてもらうことが著者の目的でもある。

著者は、一七年の教員歴をもつ、首都圏の私大文学部の四〇代後半の教授である。本書は、この著者の「分身」である「文学部S教授」の語りを通して、大学教授の実像や大学生の実態を克明に記し、大学生生活の意義や大学の方について考察を加えたものである。

本書は、以下の本編三章と、善末資料的な意味合いのある「大学生のための情報源」卒業論文等執筆の手引きと参考図書・サイト」の四章から構成されている。

自身で「何を学ぶかを学ぶ場所」であり、「自ら考え、行動しかつ物事への批判的態度を身につけるプロセスの場」であると言っ。そして、大学における教育サービスの強化が叫ばれる中、過剰なサービスに向かうのではなく、その本質を見極める必要性を説く。例えば、ゼミ生以外の学生に対しても、職義などで、一人ひとりの学生の「名前」を呼び、一声かけ、その反応を見ながら学生の様子を知ることなども実は大切なのではないかと指摘する。教員との触れ合いすなわちコミュニケーションを求めている学生は多いとS教授は見ている。

教師としての「愛情」が溢れる

大学教育を考えていく上で貴重な一冊

後 藤 登

大学生の常識
鈴木雄雅



46判・191頁・1000円
新潮社
4-10-603507-3

「一章「大学教授とはどんな人種か」では、「S教授のスケジュール」をもとに、教育・研究・学内業務に携わる大学教授という職業が語られ、決して「好きな時間に、好きなことを教えている」わけではない実態が明らかにされている。

本書のタイトルともなっている第二章「大学生の常識」は、講義、ゼミ、試験、卒論、サークル、アルバイト、就職活動など、大学生活の実態や大学生自身の意識を紹介し、それらの意義について考察を行っている。その際、「三年生の一日」「四年生のスケジュール」をはじめ、ゼミ生「生の声」を多く取り上げている点は本書の大きな特徴である。

そして、第三章「大学と「フ」マーケット」では、いわゆる少子化時代の大学のあり方について、さまざまな考察や提言を行っている。

S教授は、大学とは、自分自身で「何を学ぶかを学ぶ場所」であり、「自ら考え、行動しかつ物事への批判的態度を身につけるプロセスの場」であると言っ。そして、大学における教育サービスの強化が叫ばれる中、過剰なサービスに向かうのではなく、その本質を見極める必要性を説く。例えば、ゼミ生以外の学生に対しても、職義などで、一人ひとりの学生の「名前」を呼び、一声かけ、その反応を見ながら学生の様子を知ることなども実は大切なのではないかと指摘する。教員との触れ合いすなわちコミュニケーションを求めている学生は多いとS教授は見ている。

卒論を書けないなど、学力・能力が低下している最近の学生に対しては厳しい意見を持つS教授ではあるが、本書の底流には、常に学生の声に耳を傾け、その実態をつぶさに観察しながら、「主体性」のある人間として学生を「教え育みたい」という教師としての「愛情」が溢れている。これからの大学教育を考えていくうえで貴重な一冊となるであろう。(ごとう・のぼる氏II大阪学院大学助教授・メディア論専攻)

★すすき・ゆうが氏は上智大学教授・ジャーナリズム史専攻。上智大学大学院博士後期課程単位取得。共著に「ゼミナール 日本のマス・メディア」「オーストラリア入門」、監修に「日本初期新聞全集」など。一九五三(昭和28)年生。